慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカにおけるオウエンとオウエン主義者たち : オウエン生誕200年に寄せて
Sub Title	Robert Owen and the Owenites in America : essay in honour of the two hundredth anniversary of Robert Owen's birth
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.9 (1971. 9) ,p.811(25)- 819(33)
JaLC DOI	10.14991/001.19710901-0025
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710901-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

参考文献

〔1〕 K. J. Arrow, "Le rôle des valeurs boursières pour la répartition la meilleure des risque," *Econométrie*, (Centre National de la Recherche Scientifique, 1953), translated in English as "The Role of Securities in the Optimal Allocation of Risk-bearing, "*Review of Economic Studies*, April, 1964.
〔2〕 C. Berge, *Espaces Topologique, functions multivoques*, (Dunod, 1959), translated in English by Patterson as *Topological Spaces*, (Oliver and Boyd, 1963).
〔3〕 G. Debreu, *Theory of Value*, (John Wiley & Sons, 1959).
〔4〕 I. Fisher, *The Theory of Interest*, (Macmillan, 1930).
〔5〕 J. G. Gurley and E. S. Shaw, *Money in a Theory of Finance*, with a Mathematical Appendix by A. C. Enthoven, (The Brookings Institution, 1960), 邦訳桜井欣一郎『貨幣と金融』(至誠堂, 1963 年)。
〔6〕 J. R. Hicks, *Value and Capital*, 2nd ed., (Oxford Univ. Press, 1946), 邦訳安井琢磨・熊谷尚夫『価値と資本』(岩波書店, 1951 年)。
〔7〕 J. Hirshleifer, "Investment Decision under Uncertainty: Choice-Theoretic Approaches," *Quarterly Journal of Economics*, November, 1965.
〔8〕 T. Ichiishi, "A Note on a Covariance Matrix with its Application to the Two-Parameter Hypothesis on Risky-Asset Choice," *Review of Economic Studies*, April, 1969.
〔9〕 H. Markowitz, "Portfolio Selection," *Journal of Finance*, March, 1952.
〔10〕 H. Markowitz, *Portfolio Selection*, (John Wiley & Sons, 1967), 邦訳鈴木雪夫（監）『ポートフォリオ選択論』(東洋経済新報社, 1969 年)。
〔11〕 M. Morishima, "Consumer's Behavior and Liquidity Preference," *Econometrica*, April, 1952.
〔12〕 T. Negishi, "On Social Welfare Function," *Quarterly Journal of Economics*, February, 1963.
〔13〕 D. Patinkin, *Money, Interest, and Prices*, 2nd ed., (Harper and Row, 1965).
〔14〕 J. Tobin, "Liquidity Preference as Behavior Towards Risk," *Review of Economic Studies*, February, 1958.

（東京大学大学院経済学研究科博士課程）

研究ノート

アメリカにおけるオウエンとオウエン主義者たち

——オウエン生誕 200 年に寄せて——

白　井　　厚

1. ニュー・ハーモニィの意義

ロバート・オウエンが3年間にわたってアメリカで行なった New Harmony Community of Equality の実験は，87年に及ぶ彼の長い活動の生涯からすれば，一炊の夢，南柯の夢にも似て，波乱に富みつつもはかないユートウピアの展開であった。しかしそれは，短期間で挫折したとはいえ，社会思想史上においては，単なる実験と呼ぶにはあまりにも重要な意義を持った実践なのである。

第1に，それはオウエンの理想を最大限に実現しようとした実践であった。オウエンは，いわゆる“空想的社会主義者”の中でも，いやあらゆる社会主義者の中で最も実践的であって，ニュー・ラナーク工場における“奇蹟”的“統治”の成功，世界で最初の幼稚園創設，成人教育，労働時間短縮，工場法制定運動，全宗教否定宣言，共産主義社会建設の提案，協同組合運動指導，労働交換所開設，全国労働組合大連合指導など，そのいずれか一つだけをとってみても，歴史に名をとどめるものである。しかしとりわけニュー・ハーモニィの実験は，部分的な改良ではなく彼のユートウピアを限られた土地ながら全面的に開花させようとしたもので，彼の活動の転機であり，(1) かつ頂点を示すものと言えよう。

第2に，ニュー・ハーモニィ村は世界でおそらく最初の非宗教的共同体の実験であって，その後に現われる多くの共同体運動の先駆である。(2) 共同体運動は，その後社会主義が政治主義や階級闘争主義に傾いたためいくぶん影を薄くしたが，その運動は地下水脈のごとく連綿と続く。そして今日物質文明，大衆社会状況，疎外，官僚主義，環境破壊などに対する批判が強まり，人間のあり方を模索して共同体の実験が再評価されつつある時，ニュー・ハーモニィは，文字通り新しい調和の先駆的実験として高く評価されるべきだろう。

第3に，ニュー・ハーモニィはアメリカの歴史に大

注(1) “オウエンのアメリカ時代すなわち共同体建設の局面は，1824—9 年の5年間しか続かなかったとはいえ，彼にとってはいくつかの面で決定的なものであった。彼はニュー・ラナークへは戻らなかったから，それは長い実業生活からの訣別を示した。それは，急進的社会改革者としての彼の名声を確立し，二つの大陸で弟子を得た。彼は実際インディアナの村における財産とニュー・ハーモニィの土地をすべて失い，また妻以外の家族はアメリカへ移って，そこで市民となった。"J. F. C. Harrison; *Robert Owen and the Owenites in Britain and America, the Quest for the New Moral World*, Lond., 1969, p. 6.

(2) 同じころに，オウエンの影響によってイギリスでいくつかの実験が試みられている。“私は社会のあらゆる方面の自由主義的な人びとから，この国でこの実験を始めよとせめたてられた。……私の一層熱烈な友人の多数は，その実験の成功をかたく信じ，今は彼らは，私が彼らの始めるのを許し，このことに私が助力を与えなければ満足せぬまでになっていた。……私はやむを得ずその当時のスコットランドにおいて果たして成功のチャンスがあるかどうか実験をしてみることに同意するに至った。……ダルジールの J. A. ハミルトン氏（若い方の）はニュー・ラナークから数マイルの Motherwell の彼の土地に，私をして最初のモデル協同社会を始める気をおこさせようと，全力をあげて進め，……彼の所有地の上に一協同社会を始めることが決まった。" *The Life of Robert Owen, written by himself, with selections from his writings and correspondence*, vol. I, 1857, p. 239. 五島茂訳 415—6 ページ。(訳文は多少変更，以下同じ) Orbiston (1825-7), Ralahine (1831-3), Queenwood (1839-45) などの協同村の実験に関する新しい研究としては，R. G. Garnett, "Robert Owen and the Community Experiments," in *Robert Owen, Prophet of the Poor, Essays in Honour of the Two Hundredth Anniversary of his Birth*, edited by Sidney Pollard and John Salt, 1971, がある。アメリカでは，1858年までに130の共同体があったといわれる。A. E. Bestor, *Backwoods Utopia*, 1950, pp. 235-42.

きな影響を与えている。オウエン自身は渡米後3年あまりで帰国するが，彼の実験はアメリカで最初の社会主義の実践であり，幼稚園，保育所，ペスタロッチ式教育などはいずれもアメリカで最初の試みであり，オウエンはまさしくアメリカの社会主義，協同組合運動の父であった。さらに彼の4男1女と多くのオウエン主義者たちはアメリカの地へ残り，彼らは政治家，科学者，社会運動家，教育者などとして多方面に活躍，特に19世紀前半のアメリカの奴隷解放運動，女性解放運動，科学研究，教育運動の先駆者であった。[3] オウエンは，“イギリスで労働者の利益のために行なわれた一切の社会運動，一切の現実の進歩は，すべてオウエンの名前に結びついている”[4] というばかりでなく，彼自身，その子孫，そしてオウエン主義者たちを通じて，アメリカにおける多くの社会改良や解放運動とも結びついているのである。

2. 協同村の構想

オウエンが協同村の構想を得たのは，ニュー・ポート，サフォーク，ケントなどにおける貧民の自給自足的な授産場施設，土地社会主義者 T. スペンスの弟子たちによる Society of Spencean Philanthropists，シェイカーや後述のラップらの宗教共同体についての情報（オウエンは1815年以来ラップを知っており，1820年には彼の共同体の詳細を聞いている）などと考えられ（後にクエイカーの J. Bellers による産業学校案を知り，1817年の宗教否定の大集会以後にこれを配布），協同村の建設を初めて提案したのは，性格形成学院の開設に際して行なった「ニュー・ラナーク住民への講演」（*An Address to the Inhabitants of New Lanark*, January 1, 1816）である。ここで，この学院の目的は，単に外面的な習慣を直すことではなく，この村の全住民の内面的性格も徹底的に改良することであり，個人の自主的な判断を尊重し，節度，勤勉，慈愛をもって近隣の福祉に貢献することである，と彼は訴えた。そしてこのような原理にもとづいて，単なる教育施設ではなく，すべての個人に，既存社会の統制原理の下にあるよりもはるかに恒久的な幸福を享受させる共同体の組織を提案したこと，犯罪と貧困のない，今の百倍もの知性と幸福をもった社会の形成，千年王国の到来を示唆したことは，協同社会主義へ向かっての一歩前進をものがたるものである。[5] またナポレオン戦後の恐慌の原因と救済策の研究のための Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing Poor に提出された「工場労働貧民救済委員会への報告」（*Report on the Poor*, 1817）においては，貧窮の原因を機械の導入による労働力の価値低下とし，失業労働者に職を与え，機械を労働者追放のためにではなく労働者に奉仕する手段とすることを訴え，そのために理想的な協同社会主義の村 Village of Unity and Mutual Co-operation の計画を，設計や費用の概算をも含めて示した。この書は，“工場改良者たるオウエンから，社会主義と協同組合の父たるオウエンへの転移を示す”と言われる。そして1820年5月1日にラナーク州会本会議に提出され，主著となった「ラナーク州への報告」（*Report to the County of Lanark*, 1821）は，失業の原因分析と対策のための単なる勧告という内容をはるかに超えて，資本主義の消滅を望み，それを全面的に変革するような協同組織を提案したのである。[6] さらに 1821 年には“一般に旺溢し来たった Community 設立の要求に応じ，その要求に合致するために”[7]「社会制度」（*Social System*）が書かれ，共同体の構造，分配組織，教育方法，新しい経済学の樹立，憲法などが示された。（発表は *The New-Harmony Gazette*, vol. II, 1826-1827. 1826年11月11日にはニュー・ハーモニィの講演会でオウエンがその第1章を朗読したという。）そして「窮乏原因の説明」（*An Explanation of the Cause of the Distress which Pervades the Civilized Parts of the World, and of the Means whereby it may be Removed*, in *Economist*, Sept., 1821. No. 33?）においては，協同組織による利潤

注（3） Oakley C. Johnson, *Robert Owen in the United States*, 1970, pp. 2-5.

（4） F. Engels, *Die Entwicklung des Sozialismus, von der Utopie zur Wissenschaft*, 1882, *Werke*, Bd. 19, S. 200. 訳全集 197 ページ。

（5） 拙著「オウエン」，1965年，31 ページ。この講演は，“異常極まる，反逆的な，煽動的な”ものとして告発さわぎがあったことは「自伝」に詳しい。*The Life of Robert Owen*, vol. I, pp. 118-120. 訳 214—8 ページ。

（6） その内容と分析については，拙著「オウエン」1965年，拙稿「ウィリアム・ゴドウィンとロバアト・オウエン」，「ロバアト・オウエン論集〈ロバアト・オウエン生誕二百年記念〉」1971年所収，拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」増補版，1972年，などを参照。

（7） 五島茂「Social System'（1821）考——ロバアト・オウエンの一稀覯論文について——」，前掲「ロバアト・オウエン論集」所収，90ページ。

の撤廃を明確に主張し，協同組合原理，新設備，制度の運営などを説いている。[8]

「ラナーク州への報告」を中心に，「社会制度」，「窮乏原因の一説明」の三部作は，いずれも1821年に書かれ，協同社会主義の核心的展開であり，その後の社会主義実践の具体的青写真であった。これらはもちろん政府の黙殺するところであったが，この影響を受けて，ロンドンの印刷工を中心に，オウエンの弟子ミュディが 1821 年に組織した London Co-operative and Economical Society は，最初の労働者的な協同組合であり，その機関紙 *The Economist*（週刊）は，オウエンのプランの実現をうたっている。

3. ニュー・ハーモニィ村の経過

ニュー・ラナークの工場は，その“奇蹟的”な成功にもかかわらず，オウエンが宗教を否定した結果，合資者の間でも論争，不和が激しくなり，クエイカー教徒 William Allen らの動きによって，教育方法はランカスター式に後退し，宗教が強制され讃美歌以外の音楽は廃され，ダンス教師は追われた（1824 年オウエンと合資者たちとの契約）。旧世界における資本主義制度のもとで理想を実現することには限界を感じていたオウエンは，たまたまアメリカで George Rapp[9] が創設したインディアナ州の“Harmony Society”が売物に出され，1824年の夏 Richard Flower なる英人が訪ねてこれを伝えたので，かねてラップの村の理想を聞いていたこともあり，次男 William と共に渡米し，3万ポンドで土地，建物を購入，ここに理想実現の新天地をアメリカに築く事業に取りかかったのである。（時に54歳）

オウエンが念願の理想実現の地をアメリカに求めたというのは，アメリカがヨーロッパの重苦しい因習や偏見から免れており，かねてから急進主義者たちによ

ニュー・ハーモニィ年表（Robert Owen. 1771—1858）

1824 Aug. 14	Flower とハーモニィ訪問。	Feb.	Macluria Community 派生。
Oct. 2	買収のため次男 William, Captain Donald Macdonald とアメリカへ出発。	Mar.	Feiba Peveli Community 派生。
Nov. 4	アメリカ到着。	May 30	全村民集会，村を四つにわけ財政独立。
Dec. 16	ハーモニィ到着。	Jul. 4	First Year of Mental Independence, アメリカ独立記念日。
1825 Jan. 3	買収。	Aug. 25	村民集会で新たに3人の director を選ぶ。
Feb. 25	議会で講演。	Sep. 17	全村民集会，新たな大 Community をつくってオウエン独裁制，退村者続出。
Mar. 7	議会で講演。	Dec.	火酒禁止。
Apr. 27	開村式，“Speech by R. Owen at New Harmony,” 第1次憲法，president に選ばれる。	1827 Jan.	私財を処分して個人に売却。
Jun. 5	出発。	Mar. 28	*New Harmony Gazette* に村の失敗を告白。
Aug.	帰英，ニュー・ラナーク工場支配人を辞す。	Apr.	Maclure と正面衝突。
Sep.	オハイオの Green Country における Yellow Spring Community 一時成功。	Jun. 1	出発。
Oct. 1	*New Harmony Gazette* 発行。	Jul. 24	帰国。
Nov. 6	Robert Dale Owen, Captain Macdonald, William Maclure アメリカへ到着。	1828 Jan.	全米の僧侶に討論を挑む。
1826 Jan. 18	大歓迎を受けて帰村。	Apr. 13	ニュー・ハーモニィに到着しこれを清算。
25	村民総会，7人の憲法起草委員会を設置。	Jun. 22	村と訣別し一旦帰国，またメキシコに村建設を計画。
Feb. 5	村民総会，全共産主義憲法（第2次憲法）なる。	Oct.	*New Harmony Gazette*→*The New Harmony and Nashoba Gazette or Free Inquirer*.
19	執行委員会の求めにより独裁制。	Nov.	出帆，途中ジャマイカに寄港し奴隷制を研究。

注（8） 五島茂「ロバアト・オウエン著作史・協同の一研究」，1932年，115—120 ページ。

（9） Johann George Rapp (1757-1847) はドイツから信仰の自由を求めて渡米したキリスト教徒で，Rappite または Separatist と呼ばれる 1,000 人前後の人を率いて 1814 年から 10 年間この地で荒野を開拓し，原始キリスト教の信条に即して共産主義村を建設した。売却当時には土地 20,000 エイカー，そこには 2,000 エイカーの開墾地，果樹 1,500 本，住宅 40 軒，丸太小屋 86 軒，工場 5 棟，醸造所 1 棟，倉庫 2 棟，商店 1 軒，宿屋 1 軒などがあったといわれる。売却の理由は，繁栄により怠惰の気風が現われ，また市場からも遠いためさらに新開拓地を求めたことと言われる。*Cf.* 越村信三郎「ロバアト・オウエンの夢と現実」前掲「ロバアト・オウエン論集」所収。越村信三郎「アメリカにおけるキリスト教共同村」「経済系」61 集，昭和 39 年。J. R. Arndt, *George Rapp's Harmony Society, 1785-1847*, 1965.

って可能性に満ちた自由の新天地として憧憬を寄せられていたこと，[10] 宗教的な共産部落がすでに各地に散在していて，オウエンの実験にも好意的な雰囲気であったこと，土地が安くしかも肥えていたこと，ニュー・ラナーク工場に対する棉花の供給地としてある程度事情に通じていたこと，著書やニュー・ラナークの“奇蹟”によって彼がすでに知名の士であったこと，などによるであろう。最後の点に関連しては，オウエンが1825年2月と3月の2回ウォシントンの国会議事堂で講演し性格形成原理と新社会実験のアピールをした時に，大統領モンロウ，次期大統領アダムズ，大臣，議員，裁判官その他要人が席を埋めてこれに聴きいったと言われる。

そして1825年4月，華々しく開村式を行なった時には約800人の入村者が押し寄せ，12月には1,000人を越し，なお続々入村希望者が現われ，軍事教練，幼稚園，舞踊会，音楽会，討論会が組織され，村はアメリカの新名所となるなど，表面的には成功を示した。

オウエンは4月27日の開村演説“Speech by Robert Owen at New Harmony”において，この村を無知な個人主義制度から明るい社会制度（共産主義制度）への仲宿（half-way house）と規定し，外部から招いた科学者や教育者に対していく分の優遇があること，村の完全な自治を追求するが，暫くはオウエンが施政することを述べ，過渡期たる Preliminary Society（この過渡期においては，各人は自分の労働時間によって計算された価値を自分の口座 Pass-book にプラスとして記入してもらい，引き出した消費財はマイナスに記録される。年度末の黒字は委員会の承認がなければ引き出し得ない。当初は一家族の年所得最高額を 180 ドルとしたが，その後何度か修正した。）の憲法草案を示し，3年後（1827年末）には The Community of Equality に到達することを目的とした。

だが入村に際しては選抜を行なわなかったため，オウエンがニュー・ラナーク工場の事務引きつぎのため帰国すると，たちまち村は不活発となって生産力は低下し，統制は弱まる。25年の夏には，小麦，野菜，とうもろこしの収穫は激減し，野生化した豚や七面鳥が畑を荒らしまわったと言われる。しかるにオウエンは，翌年1月に長男 Robert Dale Owen, Captain Macdonald, William Maclure, Thomas Say, C.A. Lesueur など[11] と共に帰村して再び村の経済も村民の意識も高揚したのを見て，3年計画を1年に短縮し，村を共産主義の理想[12]に急速に近づける決意をしたのである。到着したばかりのオウエン，Robert Dale Owen, Captain Macdonald そして始めからいた William Owen と他の3人が憲法起草委員となり，1826年2月5日，全共産主義憲法が制定された。この憲法は，幸福を目的とし，1. 全成人の権利の平等，2. 義務の平等，3. 生活の実務と慰安における協同的結合，4. 財産の共有，5. 言論行動の自由，6. 行為における誠実，7. 親切，8. 交際における礼儀，9. 秩序，10. 健康の保持，11. 知識の獲得，12. 最も良いものを最も有利に生産し使用する economy の実行，13. 法律の遵守，という原理をうたい，Articles of Union and Co-operation として，全村一家族の共産主義，教育の重視，21歳以上の成員の assembly による立法，Council による行政などを規定している。この憲法によって，この村は New Harmony Community of Equality と命名され，採択ののちは，3日以内に新憲法に署名することを各家族に求めたが，アナキスト的傾向を持った Macdonald らは，管理者グループを選挙によって定める制度に反対して脱村し，150人ほどで Macluria Community（Community No. 2）を新たにつくった。オウエンはこの分離を非難もせず，土地を1,300エイカー分譲している。そしてオウエンの村では，無秩序が一般化したため，共産主義開始以後わずか2週間目の2月19日には，執行委員会は満場一致してオウエンに1年間の独裁政を布くことを求め，村民の自治とは反対の方向を取ることとなったのである。3月初めには人種問題からイングランド人のみの派生部落 Feiba

注(10) *Cf.* J. F. C. Harrison, *op. cit.*, p. 55. A. L. Morton, *Foreword* to *Robert Owen in the United States*, by O. C. Johnson, 1970, ix-x.

(11) オウエンは科学者を多数つれてきてこれを優遇したため，オウエン主義はイギリス化されたサン-シモン主義だという説もある。*Cf.* Edward Hancock, *Robert Owen's Community System and the Harrid Doings of the Saint-Simonians*, 1837. “これらの科学者のうち何人かはフランス人であったことは，なお一層意味が深い。彼らはサン-シモンについて聞いたことはないかもしれないが，科学の解放の力を確信していた。C. A. Lesueur のような科学者たちや，Joseph Neef, Madame Fretageot, Phiquepal d'Arusmont に率いられた一団のペスタロッチ主義者たちは特にそうであった。” W. H. G. Armytage, “Owen and America,” in *Robert Owen, Prophet of the Poor*, 1971, p. 214.

(12) オウエンの共産主義は，エンゲルスによって“明確な共産主義”と賞讃されている。F. Engels, *Herrn Eugen Dühring's Umwälzung des Wissenschaft, Werke*, Bd. 20, S. 247. 訳全集 274 ページ。

Peveli（Community No. 3, 約70人）が別れた。

矛盾の根源は，こうした統治形態よりは，むしろそれを支える経済問題にある。軍事教練やダンスや音楽会や討論会はうまく行われても，生産面では混乱し，製材，製帽，靴，石けん，ろうそく製造などがうまくいっただけで，ラップ派時代の設備がありながら農・工業とも生産力が上がらず，村の経済・財政はさらに深刻となった。そして5月30日には財産処分問題から全住民集会が開かれ，村を4部に分割して各部は独立財政をとり各部間の貨幣取引を認めることとした。村の財政難のために，オウエンは私財をつぎこみ，1日2食，粗衣粗食で活躍したが，村民の労働意欲は減退し，生産性は増大しない。しかしあくまで楽観的なオウエンは，その打開策として新たに The New Harmony Community No. 1 という大 community をつくり，共産制を強化し，5年間自分と自分が任命した4人の指導者が全権を掌握してそれを統治することを9月17日に提案，独裁制をめぐって議論が紛糾し，この憲法変更は認められるが，退村者は続出して，危機は一層深まった。残留者をもとに村は一応の小康を得るものの，翌 1927 年には，私有財産制が復活し，3月 28 日の *New Harmony Gazette* で，ついにオウエンは New Harmony の失敗を認めるに至る。4月にはオウエンはマクリュアと正面衝突し，マクリュアは退村，オウエンは6月に一度帰国，翌年4月13日にニュー・ハーモニィの事業を清算，土地を4人の子供に分与して，大いなる実験の挫折感を胸に11月に出帆した。この実験によって失った彼の私財は，全財産の5分の4にあたる4万ポンドと言われる。[13]

オウエンは，翌年6月に帰国ののち，さらに共産村の建設を企ててアメリカ大陸に引き返し，メキシコの大統領と交渉してアメリカ合衆国との国境地方を借りる約束を得たが，議会の反対によって成功せず，以後は故国イギリスで社会改革の運動に専心することとなる。

4. 失敗の原因

ニュー・ハーモニィの実験は，いかに新天地アメリカに場所を得，オウエンの名声に助けられたとはいえ，宗教的共同体のような強い成員の信念もなく，資本主義の真只中で共産主義を実践しようというのだから，永続的な成功を望めないのは自明の理であろう。その失敗の原因については種々の論があるが，特に次のような点が考えられる。

1) 空想的社会主義の限界。オウエンの資本主義批判，共産主義の主張は，自ら経営者としての実践，そして社会改革の実践の中から生まれたものであり，“天才的思想の萌芽”（エンゲルス）として高く評価すべきものだが，もちろん資本主義を一つの歴史的段階として科学的に認識，分析したものではない。従って社会主義への移行を，天才や有力な指導者による啓蒙，宣伝，実験に導かれるものと考え，社会的な条件を無視して，上からのユートピア実現という道をとった。

2) オウエンの指導の問題。オウエンは燃える情熱と献身をもって村の運営に当たったが，困難を直視しないであまりにも楽観的に過ぎ，生産・分配の経済法則を無視し，過渡期を1年に縮めて一気に共産主義に突入しようとした。そしてそれによって起こった混乱の前に，今後は理想を裏切って独裁制を取り，強い非難を受けるに至る。またオウエンがしばしばイギリスへ帰ったことも混乱の一因となったろう。

3) 村民の質の問題。オウエンと共に渡来した人たちも，必ずしもオウエンの思想に熱烈に共鳴した人たちばかりではなく，古いヨーロッパ的な伝統や資本主義的営利主義，個人主義精神を拭いきれなかった。のみならず入村希望者を無差別に受け容れたため，人種，宗教，習慣などに違いがあり，かつ玉石混淆で，詐欺師や策動家，ならず者などもおり，協同，連帯の精神とはほど遠いものがあった。また勤勉や怠慢に対する賞罰がなく，熟練労働者の数が少なく，計画的な生産の協同が難しく，生産力を高めるのが困難であったし，単純労働と複雑労働，教師や音楽家と労働者の間の分配についても争いが多かった。

その他，オウエンとマクリュアとの対立，指導者層間の意見の相違，オウエンが無神論者として非難されたこと，村の人口がやや多過ぎたことなども数えうるであろう。

こうしてオウエンは，理想を追い過ぎて結局は独裁制に転じてしまうのだが，オウエンのニュー・ハーモニィが，ゴドウィン的な自由，平等，共産，アナキズムの理想[14]を放棄したとは必ずしも考えられない。オウエンが開村演説で強調したことの一つは村民の完全な自

注(13) G. D. H. Cole, *The Life of Robert Owen*, 1965, p. 248.

(14) 前掲拙稿参照。

治であり，オウエンの施政は暫定的なものとなるはずであった。1826年の第2憲法においては，権利と義務の平等，財産の共有，言論行動の自由，教育の重視などが規定されており，合衆国独立50周年記念日には演説 (Oration) を行なって，1826年の当日を「精神的独立宣言」(The Declaration of Mental Independence) の日とし，それを生涯の最も重要な事件と考え，村の機関誌 *New Harmony Gazette* は以後一面題字のところに "First (or Second) Year of Mental Independence" の句を掲げるに至っている。さらにアナキズムの伝説は，後述のウォーレンに引き継がれている。

5. オウエンの子供たち

オウエンはアメリカから去ったが，彼の4男1女および多くのオウエン主義者たちはこの地に留まって活動を続けたため，その後のアメリカ社会にオウエン主義は大きな影響を与えることとなった。[15] オウエンの玄孫キャロライン・デイル・オウエン・ボウルドウィン女史によれば，200年後の今日，オウエンの特質の多くは，この子孫たちの間に "プリズムによる分光のように存在している"。[16]

Robert Dale Owen (1801—77)

オウエン夫妻は5男3女があったが，長男は早く死んだために，ロバート・デイルは実質的には長男である。オウエンの資質を最も強く受け，スイスの Philipp Emanuel von Fellenberg の教育を受けて学院の教師となり，ニュー・ラナークの工場では父を助け，父がアメリカへ行ったあと工場を管理，ニュー・ハーモニィに渡ってからも父を助け，*New Harmony Gazette* (1825—8)，*The New Harmony and Nashoba Gazette or The Free Enquirer* (1828—9)，さらに *The Free Enquirer* (1828—34) の編集に従事し，一たん帰国して労働交換所や労働組合大連合でも父を助け，運動の機関誌 *The Crisis; or, the Change from Error and Misery, to Truth and Happiness* (1832—4) においても主筆であった。

そして1833年ごろからアメリカへ渡って帰化，多方面の才能を示して，政治，教育，労働運動，女性解放，[17] 黒人解放，産児制限などで活躍をする。すなわち，Working Man's Party の組織を試みて指導，1836—8年には民主党員としてインディアナ州議会議員となり，同州の女性の地位向上に努め，1843—7年上院議員となり，1853—8年にはナポリ王国駐在アメリカ公使となっている。特に1862年にリンカン大統領に宛てた長文の手紙は，リンカンの決意に大きな影響を与えたといわれ，その3日後には奴隷解放令が出された。またウォシントンの Smithonian Institute 創立の法案を成立せしめ，その理事となっている。1858年以降は，父と同じく心霊主義を信奉した。その著作は35種，共著3種，伝記2種に及び，次のようなものがある。

An Outline of the System of Education at New Lanark, 1824.

Policy of Emancipation, in three Letters to the Secretary of War, the President of the United States and Secretary of the Treasury, 1863.

Moral Physiology; or, a Brief and Plain Treatise on the Population, 1830.

Threading My Way. Twenty-seven Years of Autobiography, 1874.

William Owen (1802—1842)

スイスに学び，22歳の時父と共に渡米してハーモニィの買収交渉を行ない，父の不在の間もニュー・ハーモニィの経営に苦心した。*New Harmony Gazette*を創刊し，兄の渡米までその編集を行なう。Thespian Society を設立，また1827年にはニュー・ハーモニィに演劇協会をつくり，これはその後演劇学校として発展した。次の彼の日記は，ニュー・ハーモニィの実態を知る上に貴重な資料である。

The Diary of William Owen from November 10, 1824 to April 20, 1825, ed. by Joel W. Hiatt, Indiana Historical Society, Publications, vol. XIV, No. 1, 1986.

David Dale Owen (1807—1860)

兄たちと同じくスイスで学び，科学と数学を専攻，シンシナチ大学で医学博士の学位を得，地質学，古生物学を専門とした。最初の United States Geologist で，1858年，ニュー・ハーモニィに地質学研究所を建て，そこはアメリカの地質学の出生の地となっている（建物は現存）。その孫キャロラインは，生誕200年記念事業のために活躍した。

Richard Owen (1810—1890)

南北戦争当時陸軍大佐で，人道的な捕虜取り扱いによって南軍から胸像を贈られたことで有名，インディアナ大学の自然科学教授で，1872年 Padue 大学の初代学長となった。地理学者。

Jane Dale Owen (1805—1890)

次女であるが，長女も三女も比較的早く死んでいる。彼女は母と妹の死後ニュー・ハーモニィに移住し，天文学者，気象学者の Robert Henry Fauntleroy と結婚，その長女コンスタンス・オウエン・フォーントゥラロイは，ヨーロッパで教育を受けたのち，女性の地位向上のために1859年ロバート・デイル・オウエンの協力を得て女性憲章をつくり，母の家でアメリカの最初の女性クラブと言われる Minerva Society を創立したことで有名である（Fauntleroy Home として現存）。

6. オウエン主義者たち

William Maclure (1763—1840)

スコットランド人で，貧しい生まれだが商業によって産をなし，アメリカに渡って地理学を専攻し，1817年にフィラデルフィア自然科学アカデミィの会員，後に長い間その会長であった。彼と交わった自然科学者の中には，後に同志としてニュー・ハーモニィに参加した動物学者の Thomas Say，オランダの地質学者 Gerard Troost などがいる。教育学者としても活躍し，1805年にペスタロッチを訪れて以来彼の教育に影響され，しかも，財産の平等な分配，それによる知識の平等な獲得，労働者階級の団結，国立大学無用論，労働と教育の結合など，かなり急進的な主張を行なっている。

彼は1823年にオウエンに会い，アメリカで実験的農学校 farming school をつくりたいと語り合ったことがあるが，フィラデルフィアで再会してオウエンの影響を受け，ニュー・ハーモニィの教育に当たることに同意，またラップから村を買収する時その半額を提供することにもなった。オウエンはペスタロッチの教育理念をとり入れ，スイスのペスタロッチ学校で教育を行なっていた Joseph Neef 夫妻を招いたりしているので，ペスタロッチの理念は以後アメリカに大きな影響を及ぼすこととなる。オウエンは，Education Society をつくってマクリュアの入村以後教育のことは彼に一任した。マクリュアは当初の約束のように買収費半額提供を行なわなかったこともあって，1827年にオウエンと正面衝突し，村の崩壊を早めた。

Josiah Warren (1798—1874)

オウエンのニュー・ハーモニィはこと志と異なって独裁制に転化し，やがて失敗してしまったのだが，そのアナキズム的要素を発展させたのがウォーレンである。彼は名門の出身，有能な音楽家，発明家で，不屈な開拓者精神に燃え，反権威主義，反政治主義の協同組合社会というオウエン的理想を掲げつつ，画一性を排して個人主権の原理を追求し，オウエンの挫折を教訓として，1827年ごろ Time Store と呼ぶ最初の実験をシンシナチで始めた。それは後のプルドンの構想に似ているが，プルドンの思想形成よりは10年以上も早く，労働時間にもとづき搾取のない公正な交換というオウエンの提案を実行するものである。この店では商品を原価で売り，店主の手数料としてはその労働券を客に求め，客はそれによって手数に見合う労働時間を店主に贈るという約束をした。こうして労働にもとづく交換，相互扶助という精神を養い，さらに1833年には *Peaceful Revolutionist* という最初のアナキズムの新聞を出して彼の思想を広め，入念な計画のもとに，1834年にオハイオ州で自由な合意にもとづく Village of Equity を建設した。"オウエン主義的，フリエ主義的共同社会の階層支配的構造は捨てられて，簡単な相互契約が結ばれ，実際それは，およそ2世紀前のセント・ジョージの丘におけるウィンスタンリの冒険以来，あらゆる国の中で最初のアナキズム共同社会であった"。[18]

それはマラリアの発生によって失敗したが，自分の理論に確信を持つウォーレンは，1846年には Utopia という第2のコロニィを建設し，そこには憲法も法令

注(15) "オウエン一家はそれ自体が真剣な研究に値いするし，ニュー・ハーモニィにおけるオウエン家の文書を最近収集統合したことは，研究の出発点として便宜を与えている。" J. F. C. Harrison, "A New View of Mr. Owen," in *Robert Owen, Prophet of the Poor*, 1971, p. 5.

(16) 「今日私たちの間にあるロバアト・オウエン」，前掲「ロバアト・オウエン論集」9ページ。なおオウエンの系図については，五島茂「オウエン系図」，「政経論叢」37巻5，6号，田中千代松「ロバアト・オゥエンとその子その孫——新スピリチュアリズム三代伝承——」，「経済論集」No. 8. などがある。

(17) ロバート・デイル・オウエンと，ウルストンクラーフトの関係については，拙稿「女性解放思想史上におけるメアリ・ウルストンクラーフト」，W. ゴドウィン著，拙訳「メアリ・ウルストンクラーフトの思い出」所収，228—231ページ。

注(18) George Woodcock, *Anarchism, a history of libertarian ideas and movements*, 1962, p.432. 拙訳II，292ページ。

も規則もなく，全く個人主義的原理によって運営された。それは約100人の住人と小さな木工場から成り，20年存続した。ウォーレンはさらにロング・アイランド島に Modern Times という共同体をつくり，これも20年ほど続いたが，南北戦争後資本主義が安定するに及んで，幾分協同組合的傾向をもった村に変わったようである。彼の“個人主権”原理は，イギリスにおいて J.S. ミルの注目をひき，[19] その後 Stephen Pearl Andrews と Lysander Spooner がウォーレンの後継者となり，彼らは奴隷解放，女性解放にも貢献している。

こうしてウォーレンは，アメリカの歴史において，最初の本格的なアナキストであり（ペインやジェファスンはもちろん本格的なアナキストとは言えない），ウィンスタンリ以後最初のアナキズム社会の実験を行ない，プルドン主義の先駆であり，奴隷解放，女性解放にも思想上の影響をもたらしたといえよう。その著書には，次のものがある。*Equitable Commerce*, 1846. *Practical Details in Equitable Commerce*, 1852.

Frances Wright (1795—1852)

彼女の父は自由主義者で，ペインの「人間の権利」を回覧しフランスの政治論を翻訳した。彼女は2歳半で両親を失い，全くの独学で学んで18歳の時にはエピクロス哲学擁護の小説を書いている。アメリカの歴史，特に革命史に興味を持って，1818年妹とアメリカへ向かい，2年間滞在，その時の手紙は *View of Society and Manners in America* として出版されており，また *Atorf* という悲劇を書いて上演された。1821年から24年にかけてパリにあって Lafayette ら自由主義的指導者と交わり，24年に奴隷問題を解決せんとアメリカへ戻り，Nashoba 川のほとりに土地を買って黒人奴隷を住まわせ，自由を得させようとした。この企ては，土地が悪く黒人は怠惰となり彼女自身も病気となり挫折，ヨーロッパへ戻ってその時シェリ夫人（ウルストンクラーフトの娘）と知り合って手紙を交換している。それによると，“愛情が唯一の結婚となり，親切な感情と行為が唯一の宗教となり，他人の感情と自由の尊重が唯一の制約となり，利益の結合が平和と安全のきずなとなるような社会の建設の基礎を置く”ことに没頭したと言っている。アメリカへ戻って[20] ニュー・ハーモニィへ入り，オウエンの影響を受け，また R. D. オウエンと協力して1829年1月に *Free Inquirer* 誌を発行，離婚法，富の再分配，工芸教育などを主張，以後各地で演説して奴隷解放，女性解放の先駆者として活動した。ニュー・ハーモニィで知った Phiquepal Darusmont と1838年フランスで結婚し1女を得たが，後に離婚，晩年は病気がちで不幸だったようである。

ニュー・ハーモニィ関係の資料・文献

The New-Harmony Gazette, vol. I—III, Oct. 1, 1825—Oct. 22, 1828.

The New Harmony and Nashoba Gazette, or The Free Enquirer.

Paul Brown, *Twelve Month in New Harmony: Presenting a Faithful Account of the Principal Occurrences which have taken Place there within that Period*, 1827.

George B. Lockwood, *The New Harmony Movement*, N.Y., 1905.

Frank Podmore, *Robert Owen, a Biography*, 1906, reprinted 1923. Chap. 13, 14.

Nora C. Fretageot, *Historic New Harmony, a Guide*, new ed., 1923.

Caroline Dale Snedeker, *The Town of the Fearless*, N.Y., 1931.

The New Harmony Story, 3rd ed., 1959. *Account of a Society at Harmony*, taken from *Travels in United States of America, in the Years 1806 and 1807, and 1809, 1810, and 1811*, by John Melish.

Arthur Eugene Bestor, *Backwoods Utopias: the Sectarian and Owenite Phases of Communitarian Socialism in America, 1663-1829*, Philadelphia, 1950.

Frank Thistlethwaite, *America and the Atlantic Community: Anglo-American Aspects, 1790-1850*, N.Y., 1963.

William E. Wilson, *The Angel and the Serpent*, Bloomington, 1964.

Irving Leibowitz, *My India*, 1964.

Marguerite Young, *Angel in the Forest*, 1945, new ed., 1966.

J. F. C. Harrison, *Utopianism and Education: Robert Owen and the Owenites*, 1968.

（経済学部教授）

注(19) “それからまたウォーレンという毛色の異なったアメリカ人が「個人の主権」ということを基礎として一つの社会組織を組み立て，多数の同志を得て，実際に一つの村落共同体をつくりあげることに着手した。（もっとも私は，それが今日でもなお存在しているかどうかは知らない）。それは皮相的には，社会主義者の計画のあるものに類似した点もあるようではあるが，主義においては，それと全然正反対のものである。と言うのは，それはすべての個性に対して発展の自由を平等に強制すること以外には，個人に及ぼす社会のいかなる強権も，一切認められていないからである。……私はウォーレン主義者から，「個人の主権」という用語を借用したこともあった。” J.S. Mill, *Autobiography*, Longmans ed., p. 147. 西木正美訳 299 ページ。

(20) “彼女の計画は，協同主義をオウエンから，黒人解放思想を George Flower から得た。” W. H. G. Armytage, *op. cit.*, p. 222. *Cf.* A. J. G. Perkins and Theresa Wolfson, *Frances Wright: Free Inquirer*, 1939.

回帰分析の方法

——主成分分析の応用——

佐　藤　　保

（1）

これまで筆者は同一の簡単な資料を用いていろいろな計算を行なってきたが，ここではその続きとして，主成分分析 (principal components) の計算を行なってみる。資料は

表 1

	Y_1	Y_2	X_1	X_2	X_3
昭和27	7096	8330	1163.5	100.0	9241
28	8741	8250	1505.1	95.3	10575
29	10640	8000	1507.6	90.8	12834
30	10519	7697	1469.0	88.1	16230
31	12969	6497	2044.9	90.8	17514
32	15107	7000	2684.3	97.6	18696
33	14904	6700	2665.3	95.7	21408
34	17169	6300	3263.2	91.4	23148
35	22425	6700	4339.9	88.4	29020
36	24484	6000	5985.2	86.6	31200
37	28662	6350	6534.6	84.9	35568
38	29766	6275	7083.5	82.2	43200

Y_1＝セメントの生産量，Y_2＝セメントの価格，X_1＝総投資量，X_2＝石炭価格指数（原材料価格，あるいは生産コストの代用），X_3＝セメントの容量（セメントの生産能力），Y＝内生変数，X＝外生変数

方程式は

(1)　$Y_1=a_0+a_1Y_2+a_2X_1$

(2)　$Y_1=b_0+b_1Y_2+b_2X_2+b_3X_3$

(1)は需要函数を示し，(2)は供給函数を示す。今日計測の際使われる方法として，二段階最小自乗法が用いられる場合が多いが，あるいは他の方法にしても，同時方程式体系の場合，その方程式（例えば(1)）に入っている外生変数（この場合 X_1）だけでなく，その式からは除外されている外生変数を含めて内生変数の係数を推定することにする。ここに問題が生ずる。この点について，[1] T. Klock と L. B. M. Mennes の述べているところを少し引用してみよう。

(1.1)　$y=Yr+X_1\beta+u$

(1.1) は同時方程式体系の一部である線型の関係式である。ここで y は説明さるべき結合従属変数についてのT個の観測値の列ベクトル，Y は m 個の説明さるべき結合従属変数についてのT行 m 列の行列，X_1 は l 個の先決変数についての観測値のT行 l 列の行列，r と β は推理さるべきパラメーターベクトル，u は攪乱項の列ベクトルである。全体の体系は $A\geqq l$ 先決変数を含むと仮定される。観測値はT行 A の行列 X で示される。そこで

(1.2)　$X=[X_1, X_2]$

と書くことができ，X_2 はT行 $(A-l)$ 列の先決変数の観測値の行列で体系の中に入ってはいるが，(1.1) からは除外されているものである。

その方程式が識別可能 (identifiable) でなければ

注(1) T. Klock and L. B. M. Mennes, Simultaneous Equations Estimation Based on Principal Components of Predetermined Variables. Econometrica. Vol. 28, No. 1, January 1960. p. 45-62.